

野外教育施設主催のファミリーキャンプにおける 参加行動に関する研究

福満博隆・山本清洋

(2000年10月13日 受理)

A Study on Participatory Behavior in Family Camp
held under the Direction of the Institution of Outdoor Education

FUKUMITSU Hirotaka, YAMAMOTO Kiyohiro

はじめに

近年、多くの野外活動が行われ、活動人口も著しく増加する傾向にある。特に家族を一つのユニット（集団）として行われるファミリーキャンプには、急速な普及と発展がみられる。その要因として、家族形態の変移、ライフスタイルの変移、用具の普及などがあげられている¹⁾。同時に野外教育施設等において、家族ごとに募集して主催される「親子キャンプ」の企画に対する参加希望者も年々増加している。しかし、参加した家族が、どのような経緯で、何を求めて参加したのかという実態は、把握されておらず、それに関する研究報告はほとんど見られない。これらの実態を把握してキャンプの企画、情報提供、プログラム運営等を行うことは、それぞれの参加家族にとってそのキャンプが、アウトドアライフのよい動機付けになり、より豊かな家族関係への支援につながると思われる。そこで本研究は、野外教育施設主催のファミリーキャンプへの参加行動を生起させる規定要因のいくつかを明らかにするための基礎資料を得ることを目的とした。

分析枠組み

図1の社会行動論に準拠した参加行動の枠組みからファミリーキャンプへの参加行動を規定する特性を明らかにする。

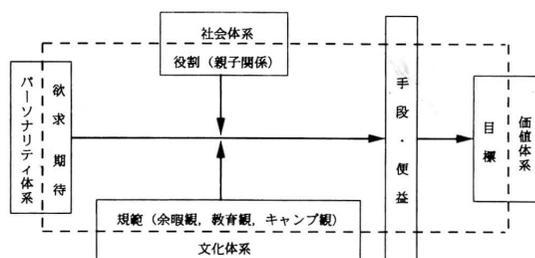


図1 参加行動の枠組み

研究方法

- 1) 調査対象のキャンプは、1998年5月3日～4日に1泊2日で行われた国立大隅少年自然の家主催の「楽しい親子キャンプ」とし、参加家族は、申込みのあった約50組の家族の中から抽選によって選ばれた36家族であった。(参加者の内訳は、父親が29名、母親が31名、子供が中学生4名、小学生49名、幼児24名であった。)
- 2) 調査対象者は、上記キャンプに参加した親60名であった。
- 3) 調査票：キャンプ前では、参加行動の枠組を基に、パーソナリティ体系に含まれる基礎項目および欲求や期待に関する項目10、文化体系に含まれる自然観および余暇観、キャンプ観、教育観に関する項目4、社会体系に含まれる親子関係に関する項目5、価値体系に関する項目2から構成した。キャンプ後では、基礎項目1、キャンプの感想に関する項目4、キャンプで具体的に得られたこと(効果)に関する項目7から構成した。
- 4) 分析方法：単純集計を行った。

結果と考察

1) キャンプ前の調査

(1) パーソナリティ体系に含まれる基礎項目および欲求や期待に関する項目

参加家族36組中、両親とも参加していたのは25組、母親のみ参加は6組、父親のみ参加は5組であった。7割の家族が両親そろって参加していることは、参加家族の多くがこのキャンプを家族全員のイベントとして捉えていることが伺われる。また7割強の親が30代であった(表1)。この親の世代が偏っているのは、キャンプが小学校低学年を含む家族を対象に募集しているからと考えられる。

家庭の経済状態(表2)については、「毎日の生活に少し余裕がある」(38.3%)および「どちらとも言えない」(45.0%)と答えた親が、「毎日の生活にあまり余裕がない」(8.3%)および「毎日の生活に全く余裕がない」(3.3%)と答えた親より多かった。すなわち、経済的に余裕のあると感じている家庭の参加が多いことを示している。

親のキャンプ経験(表3)については、「初めて」と答えた親が30.0%、「1回から4回」の少し経験があると答えた親が40.0%、「5回以上」から「15回以上」の経験が多いと答えた親が24.8%であった。すなわち、キャンプの経験が全くない親より少しでもある親の方が多くことを示している。しかし、年齢がいつ頃のキャンプ経験であるか、あるいはどの程度のキャンプ経験なのか分析できない。また、これまでの親のキャンプ経験と今回の参加との因果関係について調べることは、今後の課題である。

家族キャンプの経験(表4)については、「初めて」と答えた親が56.7%、「1回から4回」

表1 親の年齢

	(%)	
	男性	女性
20代	0.0	6.5
30代	76.0	77.4
40代	24.0	16.1
50代	0.0	0.0
60代	0.0	0.0
N.A.	0.0	0.0
合計	100	100
	N=29	N=31

表2 親の経済状況

	(%)
毎日の生活に十分余裕がある	1.7
毎日の生活に少し余裕がある	38.3
どちらとも言えない	45.0
毎日の生活にあまり余裕がない	8.3
毎日の生活に全く余裕がない	3.3
N.A.	3.3
合計	100
	N=60

表3 親のキャンプ経験

	(%)
初めて	30.0
1回～4回	40.0
5回以上	11.7
10回以上	5.0
15回以上	11.7
N.A.	1.7
合計	100
	N=60

表4 家族キャンプの経験

	(%)
初めて	56.7
1回～4回	41.7
5回以上	0.0
10回以上	0.0
15回以上	0.0
N.A.	1.7
合計	100
	N=60

の少し経験があると答えた親が41.7%と、家族でのキャンプが初めておよび経験が少しの家族がほとんどであった。すなわち、家族でのキャンプ経験がない親や経験の少ない親は、今回のような施設や指導者の整ったキャンプの方が安心して参加できるのではないかと考えられる。

キャンプへ対する親の楽しみ度（表5）については、「とても楽しみ」と答えた親が58.3%、「まあ楽しみ」と答えた親が35.0%、「どちらとも言えない」と答えた親が5.0%と、ほとんどの親が参加することを楽しみにしていたことが伺える。

キャンプでどんなことが得られたらよいかという質問に対して自由記述してもらい、同じ様な回答をまとめ以下のような結果を得た。家族関係（表6）に関しては、「家族で協力する体験をしたい」（46.7%）、「家族のコミュニケーションをより深めたい」（30.0%）と答えた親が

表5 家族キャンプの経験

	(%)
とても楽しみ	58.3
まあ楽しみ	35.0
どちらとも言えない	5.0
あまり楽しみではない	0.0
全く楽しみではない	0.0
N.A.	1.7
合計	100
	N=60

多く、子どもの成長(表7)に関しては、「自然に対する豊かな心が育ってほしい」(30.0%)と答えた親が多く、キャンプ技術(表8)に関しては、「キャンプの基本的な技術の習得」(25.0%)と答えた親が多く、自然環境(表9)に関しては、「自然に親しみたい」(28.3%)と答えた親が多かった。すなわち、これらの答えが親のキャンプに対する欲求や期待を示している。したがって、これらの親の欲求に答えられるキャンプを企画すること、また広報活動においてこれらの欲求がキャンプにおいて満たされることをアピールすることは、家族でのキャンプ参加を決定する直接的な要因の一つと考えられる

表6 親のキャンプ参加への期待(家族関係)

	(%)
家族で協力する体験をしたい	46.7
家族のコミュニケーションを深めたい	30.0
父親と触れあう機会をもちたい	8.3
家族の楽しい思い出をつくりたい	3.3
(自由記述で複数回答)	N=60

表7 親のキャンプ参加への期待(子供の成長)

	(%)
自然に対する心が育って欲しい	30.0
友達を作ったり、協力することを覚えて欲しい	15.0
自立心が育って欲しい	13.3
たくましくなって欲しい	6.7
責任感がついて欲しい	5.0
自信をつけて欲しい	5.0
(自由記述で複数回答)	N=60

表8 親のキャンプ参加への期待（キャンプ技術）

	(%)
キャンプの基本的な技術の習得	25.0
飯ごう炊さん	13.3
テント設営	8.3
キャンプでのゴミ処理方法	3.3
(自由記述で複数回答)	N=60

表9 親のキャンプ参加への期待（自然環境）

	(%)
自然に親しみたい	28.3
自然に対する心を育てたい	11.7
植物の知識を学びたい	5.0
自然の中で心のリフレッシュをはかりたい	3.3
(自由記述で複数回答)	N=60

(2) 文化体系に含まれる自然観および余暇観，キャンプ観，教育観に関する項目

親の幼少時代の生活環境（表10）については、「とても自然の豊かなところ」（43.3%）および「まあ自然の豊かなところ」（35.0%）と答えた親が、「豊かな自然があまりないところ」

表10 親の幼少時代の生活環境

	(%)
とても自然が豊かなところ	43.3
まあ自然が豊かなところ	35.0
どちらとも言えない	1.7
豊かな自然があまりないところ	15.0
全く自然がないところ	5.0
N.A.	0.0
合計	100
	N=60

表 11 親の現在の生活環境

	(%)
今の方がずっと自然が豊か	18.3
今の方が少し自然が豊か	5.0
変わらない	5.0
昔の方が少し自然が豊か	23.3
昔の方がずっと自然が豊か	48.3
N.A.	0.0
合 計	100
	N=60

(15.0%) および「全く自然がないところ」(5.0%) と答えた親より多かった。また、現在の生活環境(表11)については、「昔の方が少し自然が豊か」(23.3%) および「昔の方がずっと自然が豊か」(48.3%) と答えた親が、「今の方がずっと自然が豊か」(18.3%) および「今の方が少し自然が豊か」(5.0%) と答えた親より多かった。すなわち、親の幼少時代の生活環境と比較しながら、現在の生活環境における自然に豊かさを感じていない親が多いことを示している。

余暇観(表12)については、仕事と余暇を両立させる生活が大切である、できるならば余暇を中心とした生活が大切であると答えた親が多く、余暇志向型の親が多いことを示している。

キャンプ観(表13)については、「自然環境に触れること」(48.3%)、「直接体験をするこ

表 12 親の余暇観

	(%)
余暇志向	6.7
できるなら余暇志向	33.3
両立	58.3
まあ仕事志向	0.0
仕事志向	0.0
N.A.	1.7
合 計	100
	N=60

表 13 親のキャンプに対する価値観

	(%)
自然環境に触れること	48.3
気分をリフレッシュすること	25.0
協力すること	40.0
直接体験すること	45.0
野外での生活技術を学ぶこと	15.0
困難な体験を克服すること	5.0
N.A.	21.7
	N=60

(複数回答で2回まで)

と」(45.0%)、「協力すること」(40.0%)の順に多かった。現在の生活環境における自然に豊かさを感じていない親が多い現状を鑑みると、キャンプに参加した親は、自然志向のキャンプを求めていると考えられる。

教育観については、子どもの教育において大切にしていることを自由記述してもらい、同じ様な回答をまとめ、主な回答を表14に示した。この教育観と今回の参加との因果関係について調べることは、今後の課題である。

表 14 教育において大切にしていること

	(%)
思いやりや優しさ	18.3
自立心	15.0
他人に迷惑をかけない	13.3
あいさつや礼儀, 道徳心	8.3
伸び伸びと	8.3
明るく素直, 正直	8.3
責任感	6.7
豊かな心や感情を育てる	5.0
協調性	5.0
N=60	

(自由記述で複数回答)

(3) 社会体系に含まれる親子関係に関する項目

日頃の親子関係(表15)については、コミュニケーションが「まあとれているほう」(66.7%)と答えた親が最も多かった。これは、比較的親と子どものコミュニケーションがとれ易い関係にある、低学年を中心とした家族構成の参加者が多かったことによると推察される。しかし、「どちらとも言えない」(8.3%)および「あまりとれていない」(10.0%)、「全くとれていない」(1.7%)と答えた子どもとのコミュニケーションに自信のない親が2割もおり、子どもとのコミュニケーションがとれている親とそうでない親との視点からの分析も今後の課題である。

キャンプ情報の入手先(表16)については、「子ども・学校」(51.7%)、「行政広報」(23.3%)、「新聞記事」(16.7%)の順に多かった。主催する施設の広報のやり方に影響される部分もあるが、学校を利用した広報の方がより効率がよいと考えられる。

キャンプ参加の発言者(表17)については、母親(45.0%)という答えが父親(28.3%)お

よび子ども (23.3%) という答えよりも多かった。また、キャンプ参加の決定に対する影響力 (表18) については、父親 (45.0%) という答えが母親 (30.0%) および子ども (20.0%) という答えよりも多かった。すなわち、子どもよりも親の意志でキャンプ参加の発言が行われ、参加決定した家族が多いことを示している。

表15 日頃の親子関係

	(%)
とてもよくとれている	11.7
まあとれているほう	66.7
どちらとも言えない	8.3
あまりとれていない	10.0
全くとれていない	1.7
N.A.	1.7
合 計	100
	N=60

表16 キャンプ情報の入手先

	(%)
新聞記事	16.7
ラジオ・テレビ	0.0
雑誌・本	0.0
行政広報	23.3
子ども・学校	51.7
口込み (友達)	1.7
その他	5.0
N.A.	1.7
合 計	100
	N=60

表17 キャンプ参加発言者

	(%)
父 親	28.3
母 親	45.0
子ども	23.3
N.A.	3.3
合 計	100
	N=60

表18 キャンプ参加決定

	(%)
父 親	45.0
母 親	30.0
子ども	20.0
N.A.	5.0
合 計	100
	N=60

(4) 価値体系に関する項目

家族のキャンプ計画 (表19) については、「考えているが未定」(65.0%) および「計画を立てている」(16.7%) と答えた親が、「考えていない」(10.0%) 答えた親より多かった。このことは、ファミリーキャンプに興味を持ち、今後も続けて行いたいと思っている親が多いことを示している。

2) キャンプ後の調査

(1) キャンプの感想に関する項目

キャンプに参加した感想 (表20) では、全ての親が、「大変よかった」(76.7%) および「ま

表 19 家族でのキャンプ計画

	(%)
考えていない	10.0
考えているが未定	65.0
計画を立てている	16.7
予約済み	0.0
N.A.	8.3
合計	100
	N=60

表 20 親のキャンプ参加に対する感想

	(%)
大変よかった	76.7
まあよかった	23.3
どちらとも言えない	0.0
あまりよくなかった	0.0
全くよくなかった	0.0
N.A.	0.0
合計	100
	N=60

表 21 親のキャンプ内容に対する感想

	(%)
大変楽しかった	70.0
まあ楽しかった	28.3
どちらとも言えない	0.0
あまり楽しくなかった	0.0
全く楽しくなかった	0.0
N.A.	1.7
合計	100
	N=60

表 22 親の家族キャンプ実施希望

	(%)
是非やりたい	66.7
機会があればやりたい	31.7
どちらとも言えない	1.7
あまりやる気はない	0.0
全くやりたくない	0.0
N.A.	0.0
合計	100
	N=60

表 23 キャンプをやりたい理由

	(%)
自然体験の良さを子どもに教えたい	18.3
子どもにとってよい体験ができて楽しんでいたから	16.7
家族の触れあいや協力することがすばらしいから	15.0
キャンプのノウハウが理解できたから	6.7
(自由記述で複数回答)	N=60

あよかった」(23.3%)と答えていた。また活動内容に対する感想(表21)でも、ほとんどの親が「大変楽しかった」(70.0%)および「まあ楽しかった」(28.3%)と答えていた。すなわち、ほとんどの親が今回のキャンプに対して満足していることを示している。

今後の家族でのキャンプ実施（表22）では、ほとんどの親が「是非やりたい」（66.7%）および「機会があればやりたい」（31.7%）と、キャンプ実施を希望していた。その理由について自由記述してもらい、同じ様な回答をまとめて表23に示した。「自然体験の良さを子どもに教えたい」（18.3%）、「子供にとってよい体験ができとても楽しんでいたので」（16.7%）、「家族のふれあいや協力することがすばらしいから」（15.0%）という答えが多かった。したがって、キャンプに参加した満足感は、今後の主催ファミリーキャンプへの参加行動や家族のみでのキャンプ行動を生起させる要因になると考えられる。

(2) キャンプの効果に関する項目

キャンプを通してどんなことが得られましたかという質問に対して自由記述してもらい、同じ様な回答をまとめ以下のような結果を得た。家族関係（表24）に関しては、「親子のふれあいができた」（28.3%）、「家族が協力する機会を得た」（20.0%）と答えた親が多く、子どもの成長（表25）に関しては、「責任を持たせると、思った以上にしっかりしていた」（30.0%）と答えた親が多く、キャンプ技術（表26）に関しては、「まきで上手にご飯を炊くことができた」（13.3%）と答えた親が多く、自然環境（表27）に関しては、「豊かな自然に触れることができた」（23.3%）と答えた親が多かった。これらの答えをキャンプ前の期待と比較すると、家族関係とキャンプ技術では、期待した通りの結果が得られ、子どもの成長では、期待した以上の結果が得られていたと思われる。また、自然環境では、自然と具体的に触れあったことが挙げられており、自然との直接体験の意義が伺える。

表 24 キャンプの効果（家族関係）

	(%)
親子のふれあいができた	28.3
家族が協力する機会を得た	20.0
子どものことを少し理解できた	3.3
（自由記述で複数回答） N=60	

表 25 キャンプの効果（子供の成長）

	(%)
責任を持たせると思った以上にしっかりしていた	30.0
新しい友達を作った	13.3
野外活動の様々な体験ができた	8.3
いろんなことに興味を持ち積極的に活動していた	6.7
（自由記述で複数回答） N=60	

表 26 キャンプの効果（キャンプ技術）

	(%)
まきで上手にご飯を炊くことができた	13.3
テントに関する知識や技術を学んだ	10.0
基本的なことを習得できた	8.3
(自由記述で複数回答) N=60	

表 27 キャンプの効果（自然環境）

	(%)
豊かな自然に触れることができた	23.3
虫や鳥の声、風や水の音など聞くことができた	18.3
野いちごを食べることができた	6.7
(自由記述で複数回答) N=60	

教育観の変化（表28）については、今回のキャンプを経験を通して子育てにおける考え方に「少し変化あり」（45.0%）および「大きな変化あり」（16.7%）と答えた親が、「あまり変化なし」（10.0%）および「全く変化なし」（1.7%）と答えた親より多かった。具体的な例を自由記述してもらい、同じ様な回答をまとめて表29に示した。「できることをもっと何でもやらせたい」（10.0%）、「子どもにはいろいろな体験を積ませることが重要だと思った」（3.3%）などの答えがみられた。この様な子どもに対する積極的な思いは、子どもと親と一緒にキャン

プをすることではじめて得られる効果といえる。この様な意識を親が持つことは、今後の主催ファミリーキャンプへの参加行動や家族のみでのキャンプ行動を生起させる要因になると考えられる。

また、子供の成長を目的に子どもだけをキャンプに行かせることの意義は以前から述べられ、多くの青少年育成キャンプが学校教育や社会教育の場で行われてきているが、今後は、子どもと親と一緒にキャンプをするファミリーキャンプの意義や効果、プログラムについての多くの検討が早急に必要であると考えられる。

表 28 教育観の変化

	(%)
大きな変化あり	16.7
少し変化あり	45.0
どちらとも言えない	23.3
あまり変化なし	10.0
全く変化なし	1.7
N.A.	3.3
合計	100
N=60	

表 29 教育観の変化の具体例 (自由記述)

	(%)
できることをもっと何でもやらせたい	10.0
子どもにはいろいろな体験を積み重ねることが重要だと思った	3.3
もう少し大人として見てあげよう	3.3
子どもに楽しみながらさせるとよくやるものだと思った	3.3
おおらかに育てていきたい	3.3
子どもを見直すことができた	1.7
子どものペースを大事にしてあげたい	1.7
他の家族の子育てが参考になった	1.7
(自由記述で複数回答) N=60	

ま と め

今回の調査は、調査数が少ないため統計的に十分な結論を導くことはできなかったが、以下のよ
うな傾向がみられた。

- 1) 野外教育施設主催のファミリーキャンプへの参加行動を生起させる規定要因として、親が経済
的余裕を感じていること、親にキャンプ経験があること、親が余暇志向型および自然志向型であ
ること、学校を中心とした子供からの情報があることが考えらる。
- 2) ファミリーキャンプに対する参加への発言や参加決定は、親の意志に起因する傾向があり、家
族で参加する直接的要因として、家族で協力する体験をしたい、家族のコミュニケーションをよ
り深めたい、子供と一緒に自然触れたい、子どもに自然に対する豊かな心が育つ機会を与えたい、
施設や指導者への安心感という親の主体的要因および、親の欲求を満たすファミリーキャンプの
機能的要因があげられる。
- 3) キャンプに参加して、楽しかった、親子のふれあいや協力ができた、子どもが思った以上に
しっかりしていた、キャンプ技術を取得できた、豊かな自然に触れることができたというキャン
プ前に期待した通りの、あるいはそれ以上の満足感を得ることは、今後の主催ファミリーキャン
プへの参加行動や家族のみでのキャンプ行動を生起させる要因になると考えられる。

参考文献

- 1) 日本キャンプ協会テキスト編集委員会：キャンプ専門科目テキスト，日本キャンプ協会，1999.
- 2) 日本野外教育研究会：改訂キャンプテキスト，杏林書院，1999.
- 3) 日本野外教育研究会：野外活動キスト，杏林書院，1988.
- 4) 山本清洋，坂脇昭吉，小林平造，福満博隆：鹿児島県民の余暇活動に関する研究—現状と課題—研究成果

報告書，鹿児島大学教育学部生涯教育総合課程，1997.

- 5) 福満博隆，山本清洋：余暇行動に関する分析—都市と離島の比較—，鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編，第50巻 57-68，1999.